

q -概積多様体のチェンホモトピー

佐 伯 卓 也

Chain Homotopy in q -almost Product Manifolds

TAKUYA SAEKI

この小論においては、可微分多様体に概積構造の一般化の一つと見なされる q -概積構造を定義し、それに関するチェンホモトピーについて論じてみたい。この構造は可積分のとき、小平氏及び D. C. Spencer の導入した重foliate 構造に関係があるものと思われる。

主なる結果は q -概積多様体についてのチェンホモトピーである。これが証明されると次いで de Rham の定理またはその類似の定理が得られるのが常であるが、われわれの場合は得られない。それは q -概積構造をもつ多様体においては、微分形式の芽のつくる層が一般には fine でないからである。

§ 1 では q -概積構造の定義を与え、必要な外微分作用素についてのべる。§ 2 では slant 作用素を定義し、それから得られるいくつかの式を証明する。

§ 1. q -概積構造. M を連結パラコンパクト C^∞ 級 n 次元可微分多様体とする。その接バンドルを $T(M)$ と表わす。接 p -ベクトルのバンドルを $\wedge^p T(M)$ または単に $T^p(M)$ と表わす。そのグラスマン多元環を $\wedge T(M)$ と書く。即ち $\wedge T(M) = \sum_{q=0}^n T^q(M)$ 。特に $T^0(M)$ は実数バンドル、 $T^1(M) = T(M)$ とする。 $\phi(M)$ を余接バンドルとし、これから作られる $\wedge^p \phi(M)$ 及び $\wedge^p \phi(M)$ は前述の $T(M)$ のときと同じような意味とする。このとき $\wedge^p \phi(M)$ の横断は微分多項式である。 d を $\wedge^p \phi(M)$ 上のまたは上の微分多項式の外分微作用素とする。

多様体 M が整数 q ($1 < q \leq n$) に対して q -概積構造 $(p_1, \dots, p_\alpha, \dots, p_q)$ (簡単のために (p_α) と略記する) を有するとは次の条件を満足する射影準同型 $p_\alpha: T(M) \rightarrow T(M)$ ($\alpha = 1, \dots, q$) が存在することである:

- (i) $T_x(M)$ を点 $x \in M$ における M の接空間とすると、 $P_\alpha(T_x(M)) \subset T_x(M)$ ですべての点 x で成り立つ。
- (ii) $T_x(M) = \bigoplus_{\alpha=1}^q P_\alpha(T_x(M))$
- (iii) P_α ($\alpha = 1, \dots, q$) は C^∞ 写像である。

ここで $p_\alpha = \dim p_\alpha(T_x(M))$ とおくと、 $\sum_{\alpha=1}^q p_\alpha = n$ かつ p_α は点 x から独立である。ここですべての p_α は 0 でないと仮定する。特に $q = 2$ とすれば、 q -概積構造は Guggenheim-Spencer の意味の概積構造に帰する。更に両ベクトル空間 $P_1(T_x(M))$, $P_2(T_x(M))$ の次元が等しいときは、普通の概積構造に帰する。

q -概積構造の例としては q 個のユークリッド空間 (次元は有限であれば何次元でもよい) の積空間や、 q 次元トーラス等を考えればよい。特に後者はコンパクトな空間の例になる。

q -概積構造は射影 $\Pi_{S_1, \dots, S_q} : \wedge \phi(M) \longrightarrow \phi^{S_1, \dots, S_p}(M)$ と $\Pi_{S_1, \dots, S_q}^* : \wedge T(M) \longrightarrow T^{S_1, \dots, S_p}(M)$ を誘導する. 但し $\phi^{S_1, \dots, S_p}(M) = \Pi_{S_1, \dots, S_q}(\wedge \phi(M))$, $T^{S_1, \dots, S_p}(M) = \Pi_{S_1, \dots, S_q}^*(\wedge T(M))$ とする. $\phi^{S_1, \dots, S_p}(M)$ の横断 ϕ は型 (s_1, \dots, s_q) であるという. $T^{S_1, \dots, S_p}(M)$ についても同様である. 写像 $f : M \rightarrow M$ が q -概積構造 $(P\alpha)$ に関して型 (m_1, \dots, m_q) であるとは

$$\Pi_{S_1+m_1, \dots, S_q+m_q} \circ f^* = f^* \circ \Pi_{S_1, \dots, S_q}$$

となることである. 但し $f^* : \wedge \phi(M) \rightarrow \wedge \phi(M)$ で f から誘導された写像である.

$\wedge T(M)$ または $\wedge \phi(M)$ 上の作用素 h はいろいろな型の作用素に分解される. 即ち

$$\Pi_{m_1, \dots, m_q} h = \sum_{S_1, \dots, S_q} \Pi_{S_1+m_1, \dots, S_q+m_q} \circ h \circ \Pi_{S_1, \dots, S_q}$$

である. 外微分作用素 d は次のように分解される.

$$(1.1) \quad d = \sum_{\alpha, \beta=1}^q d_{\alpha\beta},$$

但し $d_{\alpha\beta}$ はそれぞれ型 $(0, \dots, 0, \overset{\alpha \text{ 番目}}{-1}, 0, \dots, 0, \overset{\beta \text{ 番目}}{2}, 0, \dots, 0)$ の作用素とする. $d^2 = 0$ であるから, これより次の等式が得られる.

$$d^2 \alpha \alpha + \sum_{\beta} d_{\beta\beta} d_{\beta\alpha} + \sum_{\beta} d_{\beta\alpha} d_{\beta\beta} = 0,$$

$$d_{\alpha\alpha} d_{\alpha\beta} + d_{\beta\alpha} d_{\alpha\alpha} = 0,$$

$$d_{\alpha\beta} d_{r\gamma} + d_{r\gamma} d_{\alpha\beta} = 0,$$

$$d_{\alpha\beta} d_{\beta\alpha} + d_{\beta\alpha} d_{\alpha\beta} + d_{\alpha\alpha} d_{\beta\beta} + d_{\beta\beta} d_{\alpha\alpha} = 0,$$

$$d_{\alpha\beta} d_{\alpha\beta} = 0,$$

$$d_{\alpha\beta} d_{\alpha\gamma} + d_{\alpha\gamma} d_{\alpha\beta} = 0,$$

$$d_{\alpha\beta} d_{r\beta} + d_{r\beta} d_{\alpha\beta} = 0,$$

$$d_{\alpha\beta} d_{\beta\gamma} + d_{\beta\gamma} d_{\alpha\beta} = 0,$$

$$d_{\alpha\beta} d_{r\delta} + d_{r\delta} d_{\alpha\beta} + d_{\alpha\delta} d_{r\beta} + d_{r\delta} d_{\alpha\beta} = 0.$$

さてここに新しく次の公理で各 α に対して作用素 $d_{\alpha} : \phi^p(M) \longrightarrow \phi^{p+1}(M)$ を定義する:

(i) $\phi \in \wedge^0 \phi_x(M)$, $v \in T_x(M)$ のとき $(d_{\alpha} \phi) v = (P_{\alpha} v)(\phi)$

(ii) $\phi \in \wedge^0 \phi_x(M)$ のとき $(d_{\alpha} d + d d_{\alpha}) \phi = 0$,

(iii) $\phi \in \wedge^p \phi_x(M)$ かつ $\psi \in \wedge \phi_x(M)$ のとき

$$d_{\alpha}(\phi \wedge \psi) = d_{\alpha} \phi \wedge \psi + (-1)^p \psi \wedge d_{\alpha} \phi.$$

公理(ii)の代り, それと同値な (ii') がある.

$$(ii') \quad d_{\alpha} d + d d_{\alpha} = 0.$$

所で $2 \sum_{\alpha \neq \beta} d_{\beta\alpha} + d_{\alpha\alpha} - \sum_{\alpha \neq \beta} d_{\alpha\beta}$ をつくと,

丁度上の作用素 d_{α} の公理を満足する. 但し \sum は β が 1 から q まで動いたときのすべての和で $\alpha = \beta$ となる項をのぞく意味である. 従って

$$(1.2) \quad d_{\alpha} = 2 \sum_{\alpha \neq \beta} d_{\beta\alpha} + d_{\alpha\alpha} - \sum_{\alpha \neq \beta} d_{\alpha\beta}$$

とおけば d_{α} が実在することが示される, これから直ちに $d = \sum_{\alpha} d_{\alpha}$ を得る. 一般に d_{α} は d^2

$= 0$ を満足しない、即ち境界作用素ではない。しかし q -概積構造が可積分（即ち型 P_α の 2 つのベクトル場のポアソン括弧式が再び同じ型 P_α のベクトル場であること）ならば $d a^2 = 0$ が成り立つことが示される。

命題. $d a^2 = 0$ なるための必要十分条件は $d = \sum_\alpha d_{\alpha\alpha}$ となること、即ちすべての α に対して $d_\alpha = d_{\alpha\alpha}$ となることである。

§ 2. **slant**作用素. 先ずGuggenheim-Spencer[1]に従って slant作用素について記す。 U と M を多様体とする。 $\phi \in \Phi^{r+s}(U \times M)$ とし、 c を U の特異 r -チェンとする。このとき slant作用素は次の式で定義される。

$$(\phi/c)(v)(y) = (-1)^{rs} [j_y^*(v) \lrcorner \phi] \lrcorner c,$$

従って $\phi/c \in \Phi^s(M)$ 。但し $v \in T^s(M)$ 、 $y \in M$ 、 $j_y: U \rightarrow U \times M$; $x \rightarrow (x, y)$ 。これから

$$(2.1) \quad d\phi/c - \phi/bc = (-1)^r d(\phi/c)$$

を得る。 bc は c の境界を意味する。（この証明は[1]にある。）

さて q -概積構造の場合にもどる。 M を q -概積構造 (P_α) をもつと仮定し、更に $U = U^1 \times \dots \times U^q$ とする。 $U \times M$ 上に新しく q -概積構造を

$$P_\alpha T(U \times M) = T(U_\alpha) \oplus P_\alpha T(M)$$

で定義する。この条件の下で、(2.1) 式は種々の成分に分解する。この中で 1 つの特別な場合、即ち $c = c_\gamma$ の場合を考える。ここに $c_\gamma = x_1 \times \dots \times x_{\gamma-1} \times c'_\gamma \times x_{\gamma+1} \times \dots \times x_q$ 。 c'_γ は U_γ の特異 r_γ -チェンで x_α ($\alpha \neq \gamma$) は U_α の 0-チェンとみなしてよい点とする。この状況の下では準同型 $\phi \rightarrow \phi/c$ は型 $(0, v, 0, -r_\gamma, 0, \dots, 0)$ である。(2.1) 式より

$$\begin{aligned} d_{\alpha\beta} \phi/c_\gamma &= (-1)^{r_\gamma} d_{\alpha\beta}(\phi/c_\gamma) \\ d_{\alpha\beta} \phi/c_\alpha &= (-1)^{r_\alpha} d_{\alpha\beta}(\phi/c'_\alpha) \\ d_{\alpha\beta} \phi/c_\beta &= (-1)^{r_\beta} d_{\alpha\beta}(\phi/c_\beta) \\ d_{\alpha\alpha} \phi/c_\beta &= (-1)^{r_\beta} d_{\alpha\alpha}(\phi/c_\beta) \\ d_{\alpha\alpha} \phi/c_\alpha - \phi/bc_\alpha &= (-1)^{r_\alpha} d_{\alpha\alpha}(\phi/c_\alpha) \end{aligned}$$

を得る。更に(1.2)式を用いて

$$d_\alpha \phi/c_\beta = (-1)^{r_\alpha} d_\alpha(\phi/c_\beta)$$

を得る。

§ 3. **チェンホモトピー** 先ずGuggenheim-Spencerの一般の多様体のときのチェンホモトピーについて記す。 U と M を § 2 で導入した多様体にとる。 W を第 3 の多様体とする。 F を $U \times M \rightarrow W$ なる写像とする。ここで $\lambda: \phi(M) \rightarrow \phi(M)$ を

$$(3.1) \quad \lambda\phi = (-1)^{r+1} (F^*\phi)/c$$

で定義する。但し $\phi \in \phi(W)$ とする。(2.1)式を用いて

$$(3.2) \quad (d\lambda + (-1)^{r+1} \lambda d)\phi = (F^*\phi)/bc$$

を得る。（この証明は[1]にある。）

ここで c を特に $I \rightarrow U$ なる特異 1-単体とする。また $f_t: M \rightarrow W$ を $f_t(y) = F(c(t)y)$ で定義する。 F がホモトピーを表わすなら(3.2)式は

$$(3.3) \quad d\lambda + \lambda d = f_1^* - f_0^*$$

となる。(この証明は[1]にある。)

次に § 2 で導入された q -概積構造 (P_α) をとる。 F は許容的であると仮定する。(3. 1) により定義された λ は、このとき r_α -チェン c_α に関して考えるから、それを λ_α とかいて

(3. 2) 式より

$$\begin{aligned} (d_\alpha \lambda_\alpha + (-1)^{r_{\alpha+1}} \lambda_\alpha d_\alpha) \psi &= F^* \psi / b c_\alpha \\ (d_\beta \lambda_\alpha + (-1)^{r_{\alpha+1}} \lambda_\alpha d_\beta) \psi &= 0 \end{aligned}$$

を得る。 c'_α が特に U_α 中の特異 1-単体のとき (3. 3) 式と同様にして

$$d_\alpha \lambda_\alpha + \lambda_\alpha d_\alpha = f_1^* - f_0^*$$

を得る。特に $W = M$ かつ M が可積分ならば、

$$(x_1^1, \dots, x_1^{p_1}, \dots, x_{\alpha-1}^{p_{\alpha-1}}, x_\alpha^1, \dots, x_{\alpha+1}^1, \dots, x_m^{p_m})$$

を $(x_1^1, \dots, x_1^{p_1}, \dots, x_{\alpha-1}^{p_{\alpha-1}}, 0, \dots, 0, x_{\alpha+1}^1, \dots, x_m^{p_m})$ に deform するホモトピーを作ることができる。従ってチェンホモトピー λ_α が得られて

$$d_\alpha \lambda_\alpha \phi + \lambda_\alpha d_\alpha \phi = \phi$$

を満たす。但し ϕ はすべての proper な微分形式とする。これから次の補題を得る。

補題 M を可積分な q -概積構造をもつ可微分多様体とする。 $\phi \in \phi^{s_1, \dots, s_\alpha, \dots, s_m} (M)$ ($s_\alpha > 0$) かつ $d_\alpha \phi = 0$ とする。このとき局所的に $\varphi \in \phi^{s_1, \dots, s_{\alpha-1}, \dots, s_m} (M)$ が存在して $d_\alpha \varphi = \phi$ を満足する。

文 献

- [1] V.K.A.M. Guggenheim and D.C. Spencer, chain homotopy and the de Rham theory, Proc. Amer. Math. Soc., 7 (1956), 144-152.
- [2] B.L. Reinhart, Harmonic integrals on almost product manifolds, Trans. Amer. Math. Soc., 88 (1958), 243-276.
- [3] T. Saeki, Affine transformations in a differentiable manifold with π -structure, Jour. Math. Soc. Japan, 14 (1962), 341-349.